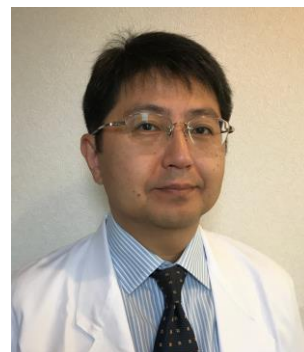




◆消化器内科診療科長に就任して

伊藤 敬義

この度、消化器内科診療科長を拝命いたしました。私はこの昭和大学江東豊洲病院開院時より消化器センターの一員としてセンター長の井上晴洋教授のご指導のもと消化器疾患診療に従事してきました。当センターは開院時に昭和大学4病院の外科、内科からスタッフが集まりましたが、現在は内科・外科の垣根のない消化器センターとして確立されています。当センターは食道アカラシアの内視鏡治療が全世界的に注目され、全国から患者さんがやってきます。同時に消化器腫瘍の内視鏡治療、最近では難治性逆流性食道炎に対する外科治療も行っております。国内外からは内科医、外科医、内視鏡医が内視鏡治療を学びに留学に来ており活気あるセンターとなっております。



私の診療科長としての役割は、地域が必要とする急性期疾患を常時受け入れ可能にすること、大学病院でなければ対応できない難治性疾患治療を積極的に行うことです。当院では連日消化管出血、閉塞性黄疸、胆管炎、急性肝炎などの緊急入院があります。このニーズに答える



病院は城東地域に少ないのが現状で、近隣医療機関の皆様にも認知され始め多くの急性期患者さんをご紹介頂いています。また難治性疾患とされる重症急性膵炎や、最近では急性肝不全昏睡型にもICUスタッフや腎臓内科など他領域の診療科と連携し対応可能となっております。

私の専門は肝疾患で、これまで多くの肝疾患患者さんの診療にあたってきました。特にC型肝炎は治療薬が進歩し、高い奏率が得られ副作用も少なく、高齢者や合併症を持つ患者さんにも積極的に治療を行っております。水曜日には肝臓外来を担当し、ウイルス肝炎、肝硬変、肝癌だけでなく自己免疫性肝疾患、NASH、肝ヘモクロマトーシス、Wilson病など診断が難しい症例も多くご紹介いただいております。これからも昭和大学江東豊洲病院の一員として地域医療、学生教育、若手医師の卒前、卒後教育、臨床研究など取り組んでいきたいと思っております。



昭和大学江東豊洲病院

第40号のトピックス

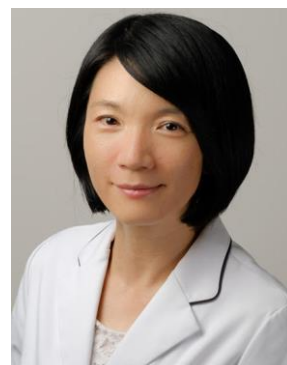
- 消化器内科診療科長就任挨拶
- 乳腺外科診療科長就任挨拶
- 救急外来・救急病棟紹介
- ベッドセンター紹介
- 編集後記

◆乳腺外科（プレストクリニック）診療科長に就任して

吉田 美和

2014年9月より昭和大学江東豊洲病院乳腺外科にて、勤めてまいりましたが、このたび、2017年7月11日付で乳腺外科診療科長を拝命いたしました。

昭和大学江東豊洲病院乳腺外科（プレストクリニック）を創設してから、3年余り経過しますが、当院が江東区・江戸川区・中央区・墨田区を中心とする地域医療を担うセンター病院としての役割を期待されて開院したということもあって、当科でもこの3年間、地域の乳腺診療を担うセンター病院として、地域連携の強化に重点をおいてきました。その取り組みがようやく実を結びはじめ、昭和大学江東豊洲病院乳腺外科（プレストクリニック）は、2016年度には年間150件の乳癌手術と、月平均外来延患者数400人以上の診療を行うまでになりました。



今後も、地域の信頼を失うことのないよう、ご紹介いただいた患者さんに対して、真摯に向き合い、丁寧な診療を心がけていくとともに、当院の土日診療のメリットを生かして、患者さんの生活スタイルやご希望に配慮した迅速な検査スケジュールおよび最適な治療を提供し、不安をなるべく早く取り除くことをかわらず心がけていきたいと思っています。また、闘病中の患者さんは、病気や治療のことだけでなく、治療中の生活においてもさまざまな不安を感じることも多く、こういった方々をチームで支えていく必要性を強く感じています。乳腺外科の今後の課題として、院内の乳腺診療に携わるスタッフをもっともっと巻き込んで、院内の連携を強化し、より良いチーム医療をめざしたいと思います。

責任の重大さに身の引き締まる思いで一杯ですが、今後もこれまでと同様、皆様にご協力いただきながら、昭和大学江東豊洲病院と地域の乳腺診療の発展のために頑張る決意でおりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



◆救急外来・救急病棟紹介 師長 池ヶ谷 佐織

当院の救急外来・救急病棟は、急激に人口増加した地域のニーズに合わせ、一次・二次医療圏の患者さんを受け入れています。総合診療科の弘重医師を中心に、各診療科医師の協力のもと、日々の治療や看護にあたっています。患者さんの疾患としては、吐血・下血、急性腹症、脳梗塞、骨折、狭心症、不整脈、熱中症、急性アルコール中毒など全科に及び、認知症の既往がある患者さんも多く入院されています。

救急外来の看護師は 17 名で、看護師によるトリアージを行っています。救急外来では CCU ネットワーク対象患者、脳卒中 A 判定患者の増加により、緊急度の高い患者さんも増加しており看護師にはより早い対応が求められています。また、救急外来業務と並行して夜間の IVR 介助にもついでおり、医師の指導のもと、患者さん・ご家族のためにと悪戦苦闘する毎日です。



救急病棟は個室が 5 床、オープンフロアが 20 床の 25 床の病棟です。日中は救急外来からの受け入れだけでなく、一般外来からの緊急入院も受け入れています。特に夜間帯は、救急外来からの緊急入院をすべて受け入れており、重症の患者さんやせん妄・認知症患者さんの対応も重なると、一息つく間もなく走り回っているのが現状です。救急病棟の看護師は 21 名で、今年度も 2 名の新人看護師を迎える事ができました。先輩看護師の指導のもと、患者さんを担当するようになり、知識・技術の習得のために一生懸命頑張っています。

救急外来・救急病棟の看護師の強みは、チームワークの良さです。救急外来と救急病棟それぞれの結束力だけでなく、お互いに助け合いながら日々の看護にあたっています。

忙しい日々の中で、救急病棟から転室された患者さんが退院の報告に来ていただいたときは、スタッフ一同、心が温まる瞬間です。

これからも、救急医療に携わる看護師として、常に患者さんにご家族のために今、何が一番必要なかを自問自答できる看護師の集団でありたいと考えています。



◆ベッドセンター紹介 山中 竜人

私たちは寝具類やリネン類、白衣等のリース及びクリーニング業務を行っております。御利用頂く方々に清潔な寝具類を提供させて頂き、かつご利用目的に合わせ多種多様な患者衣（上衣、下衣、甚平タイプ）や、検診衣などを御提供させて頂いております。また、白衣に関しましては常にクリーニングされた衛生的なユニフォームをお使い頂ける様に勤めております。

衛生的で安全なリネン類をお届けするよう『親切・信頼・清潔』を念頭に入れ一丸となり商品の衛生管理に取り組んでおります。清潔・不潔の作業エリアの分離はもちろん、出荷商品の衛生基準を設け定期的に検査を実施しております。患者さんをはじめ、患者さんと接する方々に安全で快適な商品をお届け出来るよう、洗濯技術の向上・衛生管理の徹底に努めてまいります。ベッドセンタースタッフ一同、皆様のご期待に沿うようにこれからも業務に取り組んでまいりますので、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



編集後記 大塚 直樹

梅雨はどこへやら、通勤だけでも消耗してしまうような猛暑が続いています。空梅雨で水がめの不安な状況が報道され始めました。その一方、日本各地で線状降水帯による豪雨が頻発しています。最近、地球温暖化のせいなのか何なのか、自然の脅威を感じる事が多くなっているような気がします。「〇〇年に一度・・・」というセリフもしょっちゅう聞きますが、今後このような現象は「〇〇年に一度」ではなくなってくるのではないのでしょうか。現状に胡座をかかずに常にリスク意識をアップデートして、対策を怠らないようにしたいものです。先日の 2017 年九州北部豪雨により被災された方々には心よりお見舞い申し上げ、1日も早い復興をお祈りします。



昭和大学
SHOWA UNIVERSITY

昭和大学江東豊洲病院 <http://www.showa-u.ac.jp/SHKT/>

〒135-8577 東京都江東区豊洲 5-1-38

TEL03-6204-6000 (代表)

発行責任者：笠間 毅 編集責任者：長谷川 真



Showa University Koto Toyosu Hospital